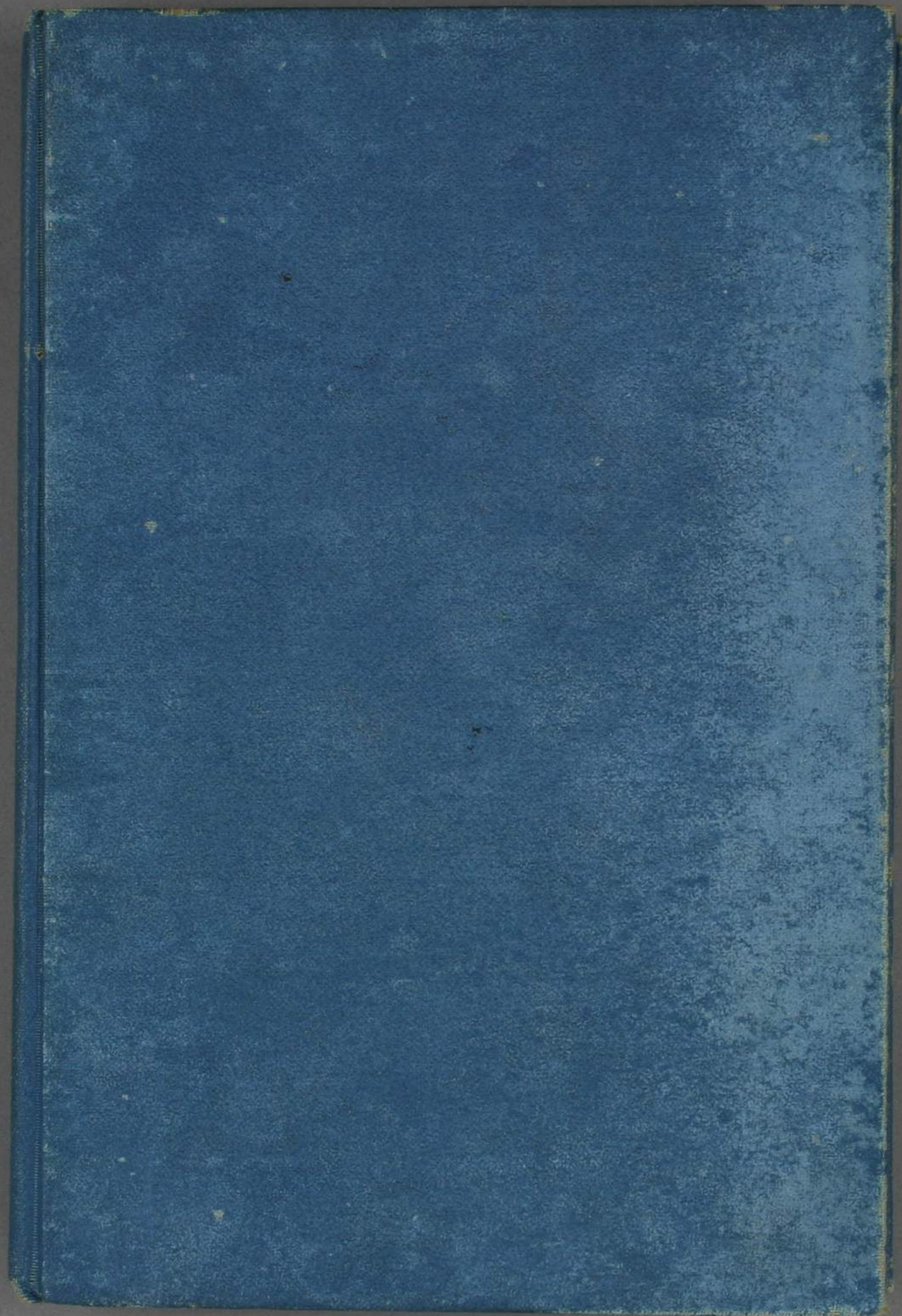
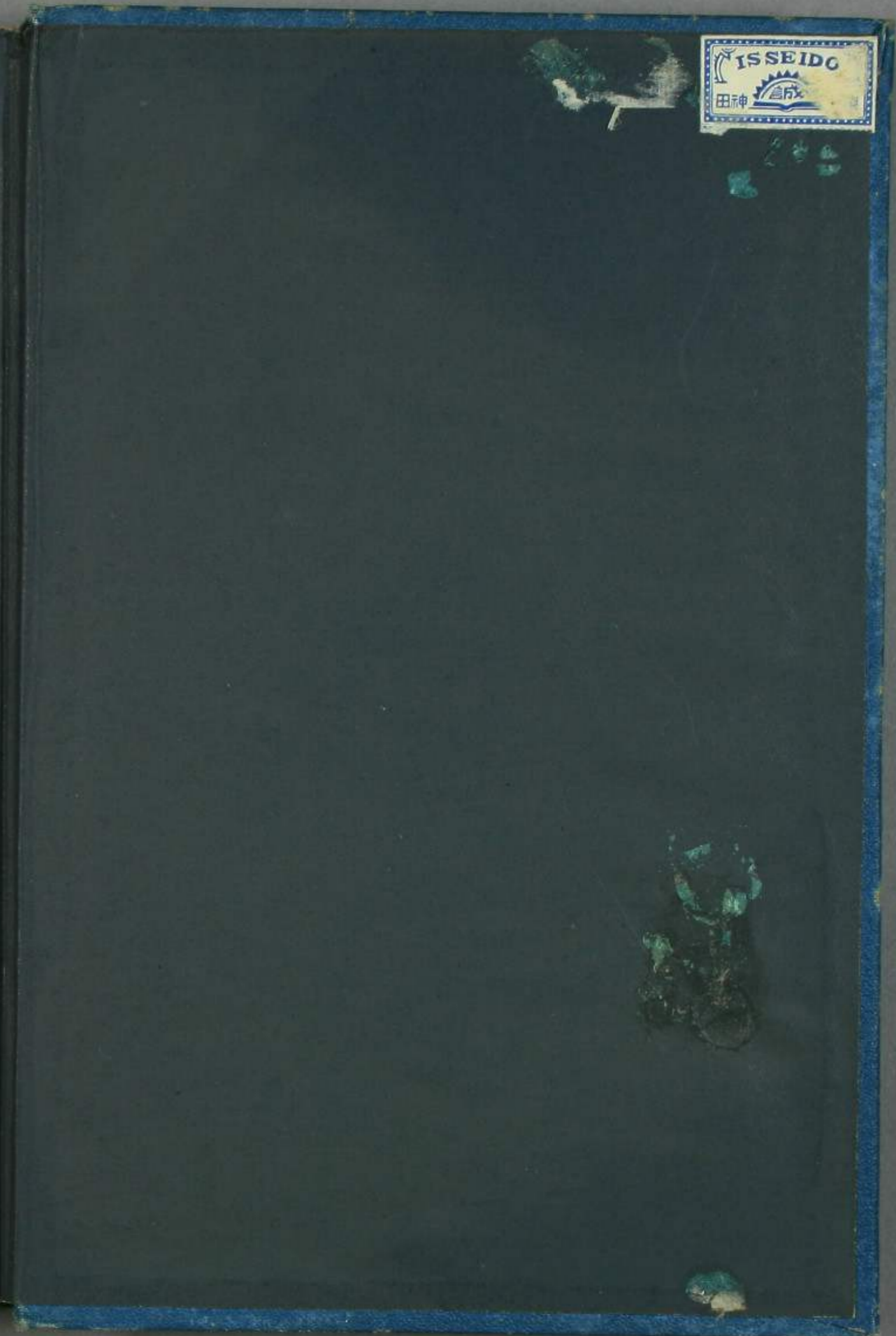
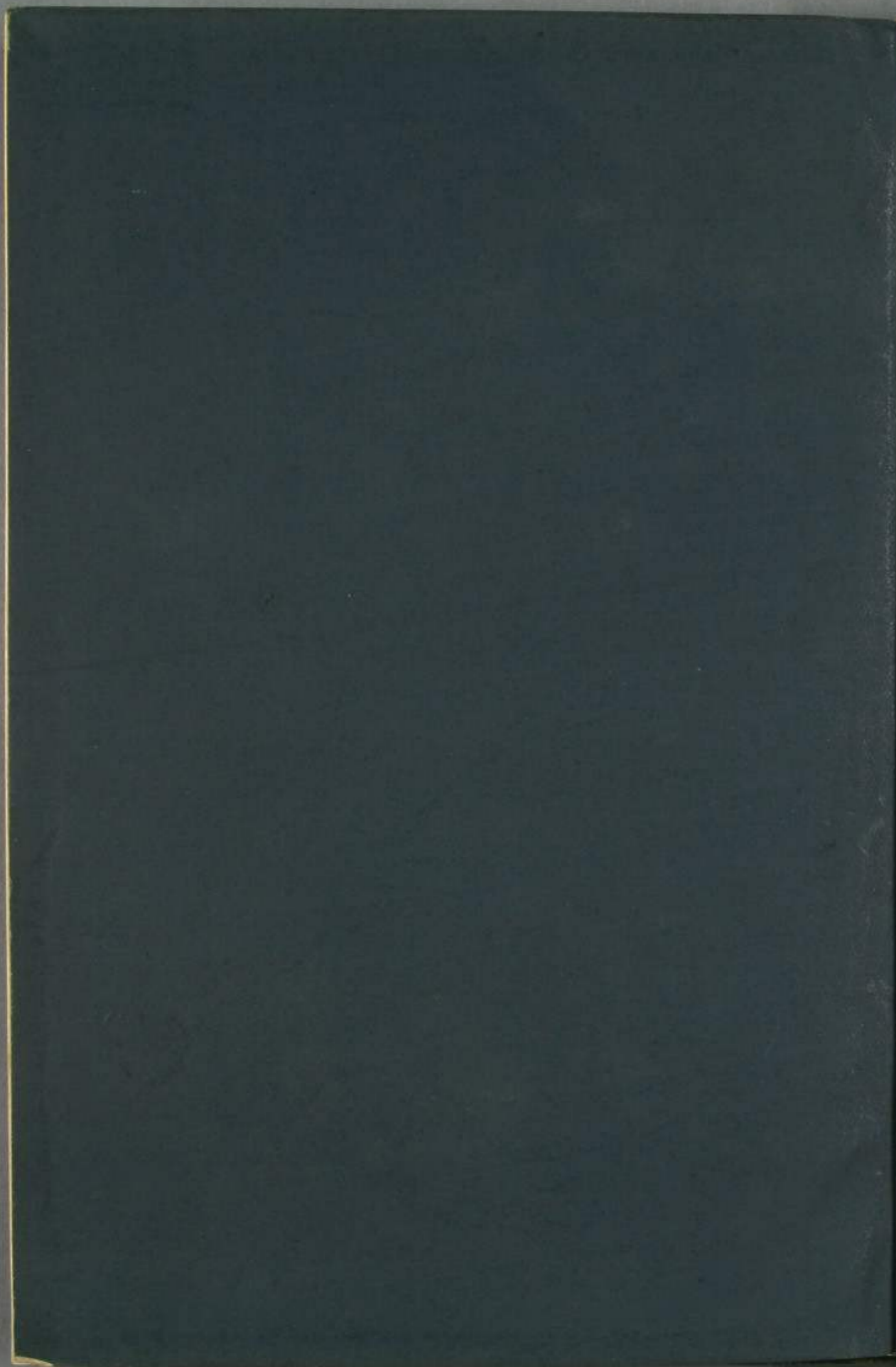


詩煉獄

高濱長江著





煉獄八



高濱長江著

IDC

煉獄へ



高濱長江著

IDC

此さゝやかある詩集を
故小泉八雲先生に獻ず

此の集にをさめたるは、廿九年來の
作品の一部であつて、いかゞはしき
舊作をも棄てなかつたのは、今ま余
が半生を顧みて、内部生活の混沌た
るに、自ら驚かうと思ふからである。

(2)

目次

煉獄へ……………一
 胸の響に……………四
 胸に耳あて……………六
 啞の聲……………一〇
 なごり……………一三
 聖像の下にイみて……………一四
 歡醉……………一九
 雨だれ……………二〇
 生を疑ひ……………二二

(3)

死を願ふ……………二三
 鳩村……………二四
 陰濕の香……………三〇
 慾……………三二
 頬の香……………三四
 ルーテルを懐ふ……………三六
 ゆくへ……………四二
 蘆の葉に……………四四
 雛鳩……………四九
 第二義……………五二

(4)

小曲	五三
朝香	五四
人妻	五八
泉のほとり	六〇
上野の森はにて	六二
埋火	六六
寂しき笑	六八
香車	七〇
生の影	七二
妖精が口づさめる	七四

(5)

虚無と西行	七九
炎むら	八二
病みほけて	八四
腫物	八六
音羽山麓にて	八八
その夜なり	九二
京人形	九四
紫陽花	九六
秋の夜の賦	九八
モーゼの眉に外三篇	一〇二

(6)

一滴	一〇六
びゆりたんの最後の胸に	一〇八
雑工學士	一一二
亡き母の繪像に	一一四
鐘	一一八
海風	一二〇
嘆	一二二
何處にか	一二四
黒き愁	一二六
轍	一二八

(7)

胸の火皿の燃えてる隙に	一三〇
若き日おもふ	一三七
やぶれし心	一四〇
小鳥	一四五
醒めすば	一四八
秋の歌	一五〇
私の全人格から	一五二
黒い瞳	一五五
落日の強き印象	一五八
君やいつこの記(附録)	一六一

煉獄へ

高濱長江著

煉獄へ

(1)

山崩れ
海は逆まき
天地も
裂けたる黎明

(2)

だみだみと
濁潮流れ
雲迷ふ。

中にただ
いざ見よ、一つ
白帆蔭——
皇妃に似たる
御君の
腕に捲かれ

(3)

接吻けぬ。

饜し世に
偽り人に
この愛を
遣らじと、急げ
煉獄へ——
『新世樂』を
聴かぬ間に。

(4)

胸の響に

枯葉散る扉の音にふと耳を
飲たれたれど二の音は響かじ、夜は
閑寂と深けゆく。——壁に冷かに
ややに停りぬ時計の音は懶氣に。
わが胸の心臓の鼓動に合はざりき。——
不安に満てる鐘世に死を待つやうに
こんやくの強き醸氣に餓えつゝも

(5)

ふと高馳る檳榔車！鼓膜に響く。
されど又過ぎゆく音は吾胸の
心臓の鼓動に合はざりし或の心願——
絶望の腫は壁を一わたり
漂ひしかど——徒爾なりき燈火ほそる。
——ふと目覺め眞暗き室に唯一人
遠鳴る海の物凄き音を數ふれど
一つだに唯一つだに吾胸の
心臓の鼓動に合はざりし深き吐息！

(6)

胸に耳あて

胸に耳あて、ふと偲ぶ
 睡つぶりて、ひたぶりに
 丑満時を今ま迎る
 夢の仲なる夢の文
 驚破とばかりに訝りぬ
 博士がすなる脈搏の
 器取る音に、はうふつと
 二十五絃も高鳴るか。

(7)

音譜は千々に引き裂けむ
 愁喜、秋、春の
 曲かなづる君が胸
 細胞走る流れには
 菩薩の息吹、蛇の息吹
 名残りて、溶けて、香ともなり
 潜むか、かゝる方寸に
 世は泣き、笑ひ、はた怒る、
 偉ひなるかな胸一つ

(8)

解くを許さじ猥らには
劍に、君に、父にさへ——
久遠に通ふ靈の宮。

さてこそ人も、世も、狂ふ

解けずば月は光るとも

常闇迎る心地して

解けずば花は薫るとも。

再びあてゝ又偲ぶ

乳房を傳ふ脈搏に

(9)

坩堝流るゝ鎔鐵を——
かくてこそ世は榮えゆく。

今は讀めたり心なき

夫を定めて、かい抱く

母の慈み、子の恨み

迷ふ黙考の二いろは。

三たび耳あて惑ふかな

夢にも夫の詩の譜を

試す曲や亂るゝと

(10)

我が假初の悪戯に。
宛ら繪なり面影を
曲線あやに匂はする
灯影みやれば二筋の
燈心ちびと燃ゆるなり。

啞の聲

黎明しらむ市街はづれ——一息ごとに
その胸を得言はで惱む身慄ひか

(11)

軌々と緩びし其の刹那！横道よりぞ
あな來る二車の仲を裂くやうに。
旗翻へる三叉路に仲を奪ふ
舊式の一臺駛る飛ぶやうに
軌道の轆音高鳴りて遷地に西へ——
高館皇妃の夢も醒むるころ。
日照りぬ。——かくて北南指したる連れも
一時は一線路に入り亂れ
緑いろ濃き柳蔭煙ふれる塵を

(12)

眞直に縫ひつゝ進む一列は、

白日くれて町々に灯れる燈火！

稍もすれば影さへ見へぬ曉の二車

仲隔つる恨みにかほのほも青く

坂登る後なる輻は喘ぎつゝ。

夜深けぬ。——かくて天明とも永遠より永遠に

わが胸の燃ゆる思に似る惱み

一線路を辿りつゝ得言はで止まん——

青光一息ごとに削る轍！

(13)

なごり

夢さめし谷の戸惑ふ朝霧を

額ほの白う彦星に袂別るゝ姿

おくれ髪も手綱もつるる厩戸に

流すに似たり鬘を天ゆく雲る。

腫にも見よ、足りきと揺ぐ愛慾の

疲るるいろか夢の香かゆく春あはき

朝霧は湖はるか迂りゆき

連翹うつる汀に物こそ思へ。

聖像の下にイみて

七彩榮ゆる風風の
 努力翅にうらぶれて
 行くや石磴木下蔭
 一鳥鳴かす澄み渡る
 み空あふぎて金佛を
 戀ひぬ、偲びぬ、頬杖して。

とづる瞳のまぼろしに
 弓弦外れしか春の曙
 ゆく雲染めし白鳩の
 影——哀怨の追憶に
 亡母の墳墓今ぞ戀ふ
 偶像を誹る君若し。
 羅馬の古廟を地に長う
 斜に映す新月の
 夢より淡き影浴びて

(16)

聖母の前に跪く
想へ—孤兒慄くを
心の絃の亂るゝを。

朱の鐘樓に家郷や戀ふ
落暉眺むる縫揚姿—
不圖はた眉を掠めたり
君に捧げし緑髪は
解けとの謎か我うれひ
乙女の胸に、雛僧に。

(17)

あゝ圓融の聖像の
おもは流るゝ夕日影
藤波匂ふ頬のあたり
無念無想の慈光の
星眸こぼるゝ韻こそ
法音竭きぬ精靈なれ
悪聲絶えぬ京の空
瓔珞嘲む絶筆に
世を憤る血や瀉ぎ

『海潮音』の一ふしを
裳あたりに誌さばや
君、讃禮の人のため。

春はこれより來るらむ
香も縹渺と梅ヶ枝に
散るや花片一二輪
垂乳あらはの御膝に
星影花と紛ふころ
抱かれて消なば願足る。

歡 醉

憂愁——いろ濃き野のをちに
今、沈みゆく日の運命！
燃へし日光もうするゝに
甘き接吻かわきゆく。

戀歌うたひし歡醉の
餘韻は胸に薫れども
世をさかしらに振舞ひし
森端に黙す——君と我れ。

雨だれ

緑流るゝ眞夏野に廢屋一つ

圍まれぬ白日ゆらに晝はさかり。

紙燭を秉りて衣づれに人目憚る

大鏡——雨だれ石は眩しげに。

若き思のやがてなる熾火のほむらか

陽炎は火のいかづちを抱く人も

吹息亂るゝ——雷の古き契に

夜とならば白痴の夢の痕のやう。

日はあかあかと明けぬれど——さは此おもひ

誰れか知る仇なる炎むらやがて又

冷へこそ渡れ夕づゝに夜半の睡言——

朝露は雨だれ石に音づるる。

黎明白らむ眞夏野にイむ君よ

誇りが雄蟬の調きかすあれ。

陶器師さへ此の痕に胸のときめき——

さなり只射貫かば一つ思ひ足る。

生を疑ひ

生を疑ひ斯くてなほ
 なほも飽かじか、接吻に
 燃ゆる日ざしに沈丁花
 こぼるる路を高馳る
 二人が影の檳榔車
 疑ひ深く見やりしは

死を願ふ

『君よ君よ。』と呼ばひつゝ
 地震に驚ゆる暗がりに
 『戸感ひすな。』と捕へたる
 刹那に觸れし朱唇の
 愛の炎に——死を願ふ
 柔肌ひしと胸に抱き、

鳩村

朝の巻

七星の衛侍や肅々
 今、歸る、聖なる扉
 紐解けば瓔珞ゆれて
 うら表榮ゆる御光
 曙の翼に乗りて
 おん姿、下界に降る、

曙の精の内侍か
 内親王姿かろらに舞ふて
 運びゆく牧場の空を
 白翼あやに打ちふり
 丁々ど黎明を宣らす
 純銀の鉦朗らかに
 天橋の花の香摘みて
 俗長巻く帷帳
 流れ來ぬ美き香美き謠

圓まるらかの湖水すべりて
今いまま醒さめぬ牧ま人の家いへは
對たい岸あし鳩つば村むらはるか

湖うみに枕まくらむ牧場ぼくじやうは青あおう
甘あま夢ゆめ流ながるゝ朝あさ香か

いろ淡あはく靡なく森端もりはに

列つら白しろう嬉うれ々々と群ぐんれ來きる

小こ羊ひつじの遊あそぶによろし

牧ま者しや今いま度たびみみて立たつ

夕ゆふの卷まき

おのがづゝ望のぞみに任まかせ

西にし東とうはた北きた南みなみ

八や千せん草そうの花はなの香か逐おふて

聖せい者しやぶる髯ひげ長なが姿すがた

艶あやかなる尼に君きみ姿すがた

書かき出いぬ群ぐんれれに群ぐんれあり

水みづ枯かれて石いしころくくの
柵さく近ちかうイいむ眼めつき

うとましと想ふか檻を
草薫り蜜も流るゝ
白百合花野の泉の汀
感謝する思あまるか

野杳かに響きにけるは
聴き馴れし曲律湛ゆる
懐しき角笛の音
九十九は今列作る
逾越の節會のゆふべ

一本の頰羊塚に。

意味深き今宵此の塚
夕榮の紫紺に照るは
ゆふべ守る精の内侍が
御輦の幕かあらぬか
星一つ輝ぐ天らに
今偲ぶ宮居の影を。

陰濕の香

灰だみし夜なり見よ
 風死して電光る
 茶毘小舎の廢屋に
 ほの白し熱蒸なり
 毒草の寐ねつゝも
 凶夢の吐息か

ふと思ふ癩病女が
 呪はれし胸の扉を
 胸の扉の軌音を
 茶毘小舎の廢屋に
 雨戸もりじめじめと
 陰濕の香ぞ蒸るゝ

慾

戀車——鼠族の車とゞろくに
 目醒ぬ天井は朦朧なり。幽かに響く
 一筋の燈心あはれ、あな哀れ——
 肺を惱める臨終の處女の呻吟！
 見よ脊髄と小脳との血管斷るゝまで
 え戀はず油皿に廢殘の骸も啜る
 蠢々と餘瀝のほこり。——はた可愛き

寢息ただよふ頬にも見よ疲憊れし色を。
 白蠟の脈打つ腕、吾首を
 解けたる恨みえ知らずて眠れる君よ、
 誰が胸の胸の奥にか影一つ
 秘むも知らず——毒草の暗き花びら、
 目瞑れば——白熱瓦斯を目がけつゝ
 亡せける蝶のけざやかか姿に——次で
 夕榮の漲る果に善惡の
 境あざみし追憶も疑惑も浮ぶ。

不^{たら}満^{にぎ}る胸^を刺^ささんか傷^まましき
白^{はく}痴^ちに似^にたる悲^ひ嘆^{たん}にえ堪^かねぬ我^{われ}は、
かか^る折^せ油^{あぶら}は竭^ききてぢと鳴^なり
暗^{くら}がる領^{りやう}に戀^{こひ}車^{ぐるま}二^にたび頻^{しき}也。

頰の香

『源氏』に倦^うみて小^せ父^{ちち}君^{きみ}が
又^{また}かい抱^{いだ}きて野^のづかさを
せとらぎ遠^{とほ}る小^こ徑^{みち}ゆく
母^{はは}の垂^た乳^{ちち}を欲^ほすれど

『泣^なきそ』と揺^ゆる子^こ守^{もり}唄^{うた}に
維^い盛^{せい}卿^{けい}の二^にの羽^は織^{おり}
緋^ひネル小^こ袖^{そで}と縷^{いと}れつと
脛^{はざ}もあ^らはに寒^{さむ}い事^{こと}――
萩^{はぎ}岡^{おか}下^{くだ}る姫^{ひめ}君^{きみ}は
未^み知^しらぬ男^{おとこ}を羞^{はづ}ざりき
『背^せに給^{たま}はれ』と父^{ちち}ぶるに
坊^{ぼう}を抱^{いだ}きて小^せ父^{ちち}君^{きみ}の
頰^ほの香^か残^{のこ}るに又^{また}頰^ほずる
唇^{くちびる}紅^{あか}し秋^{あき}の野^のに。

ルーテルを懐ふ

現代の教會に憧らすて

若き秀才が一たびは
夢にうつゝに憬がるゝ
羅馬の都城を音づれて
君歸路に黒雲を
馬上遙かに願みて
散るや白雨旅ごろも。

黄金花咲く初春の
影趁ひつゝも家づとに
藏むに耐えぬ悲歌の領
古刹の鐘は高鳴れど
紫衣に觸れつゝ小羊の
亡ぶる惨状を偲びては
空しからじな雄心に
一たび秘めし革命の
火花忽ち燃出でゝ

劫風千里燒き初むる
一枝の筆の鋒先見よ
天の靈火か凄まじや

あゝ法皇の世に施ける
精舎建つべき赦罪券
秋の木葉と拂ひつゝ
十字架暗き大伽藍の
壁上高く掲げたり
九十五條の罪のかづ

白く塗りたる奥津城を
巨人の鉄にかけしごと
おのが非行を發かれて
獅子吼の如く喚叫しかど
揺るぎ初めたる其の玉座
何權威に價する

更らに受けにし諭告をも
潮と寄せ來る庶民控え
レオの無道を叫びつゝ

火中に投げし君が意氣
零時天地も震ひけむ
羅馬法皇夢いかに

あゝ金殿の常春に
人爵街ひ衆生咒ひ
祖師の苦業を瀆したる
報羅刹が振ふ斧
玉座微塵に碎かれて
醒むる夢路は遅かりき

あゝウオームスの法廷に
黎明告ぐる巨鐘のごと
君叫びたる一言に
星と輝く皇帝も
僧正諸侯をのゝきて
世界史こゝに蘇る

ゆ く え

浪うつ灯影うすれつゝ深けゆくままに
 ほの薫る眉をつと寄せはた朱の
 唇燃ゆる笑みのあと——照らせ梅を
 今しばし聖火のほざら盗みても
 御髪は黒くふくらかに香油も甘く
 漂ふは愛の翅か頬のあたり
 夏いろ榮ゆる。——この室に星眸つぶりて

夢ながら逐ふは眞闇か光明か。
 小揺るぐ刹那みだらなる君が醒容
 ひたぶりし其たたずまひ。——白壁に
 二つの裸形うつりぬ。どまぼろし——これや
 高御位のぼりて獲たる破鏡
 ゆくえを嘆ち面伏にはたすゝり泣く
 『幽かにも夢曳きかねせ灯影に。』と——
 疲みて眠る現身は生の残骸
 いる褪せぬ戀草衣——夜は白らみ。

蘆の葉に

綾瀬河畔にて

春秋十たび遷る間に
兵燹三たび世は亂れ
遊子空しく風塵に
老いて尋ぬる古歌のあと
感慨は長し、金州の
あけに夢みし草枕

今、朽橋にイみて
天ら流れ來る一條の
蘆の花散る綾瀬川
見入るさい浪消ねてゆく
葉蔭をたちし水禽に
秋は讀めたりいろ深く

白妙舒ぶる花筏
葭の箱舟經書さし
汀あざくむ頬白影

パロの處女の面影や
石文しのぶ蒼空に
孤雲の理想高きかな。

夕榮はゆる西東
紫匂ふ江の畔
小足に急ぐ淡紅色の
裳繪姿ゆらくと
碎けて消ゆる夕靄を
寺院詣でか文使か。

花藻漾ふさい浪に
限りも知れぬ温情あり
天地のこゝろ歌人が
讀むに委しゝ境かも
愁は若き幽寂に
母の懐ろ偲びつゝ。

神秘き理想に憬がれて
不二を紫苑を呼びしかど
風たゞ寒く衣うつ

(48)

あゝ夕ぐれの此の思慕
汀に一人「尙ほ見たし
花に明けゆく神の顔」

願は足りむ今宵かな

雲の架橋天姫の

白衣姿を仰ぎたる

昔譚を歌にして

今ま書きつくる蘆の葉に

小さき讃歌を享けまさば

雛 鳩

或人の胸なぞらへて

いぶかしき籠居に

平明の曙そらを

いくあさけ夢みたる

親鳩のはばたく毎に

(49)

あたたかき風流る

浪うつか絶えず翼に

ああ今し巢離れぬ
翻つべきみ天のぞみて。

こゝろみに突とたつや

片々と落ち来る羽に

丹も榮わて滴りぬ

流れ矢はいづこに外れし。

其まゝに目瞑らば

和魂の常宮ありや

飼ぬしの手觸れば

蘇生る小野のわかれぢ。

しかはあれ時ふりて

その翼いろつや悪しく

愛らしき双の目も

おちけたりひと一倍に。

一粒の落穂だに

哀れなり啄む間さへ

いかばかり小ゆるがむ

さゝやかなの胸毛をののく。

第二義

我れを頬えむ星眸に
 燭は榮えたり誇りかに
 燃ゆる接吻やはらかに
 飽かじされども冷に
 『詩は戀にもえ換へじ』と
 いつしか寐ねし—あな曉に
 君を犯せる人刺して
 血しほ滴る白刃に—

小曲

覺めて、をののく。詩も人生の
 第二義なりや。—ふと惑ふ。

若艸の香にも酔ひしか。
 相抱きて寐ねたる首を
 一時に呼吸さへ絶たば
 蛇の巻くをも辭せじ。
 虹架る—湖なりきこゝは。

朝香

曉鐘の餘韻か虚空より
 夢魂の双翼か虚空より
 讃歌の薫風か虚空より
 精靈の息吹か虚空より
 聖堂を流るゝ朝香して
 金色榮ゆる經机
 曙の七星語らひて
 帷幕入りぬるまばたきに

燭光ゆるゝ七燈明
 香の烟と立ち昇る
 黒衣姿の尼君の
 祈禱も添ふて文なして、
 ああ白蓮の花冠
 今、聖壇に額づきて
 負ふか小羊、世の罪を
 君、奉る懺悔は
 天使の翅經て
 昇るか聖門に衣手に、

罪なき君が世の罪を
さばかり悔ゆる心こそ
滅亡ゆくらむ天地を
綾に縫ふべき綾なれや
古巢に歸る鳥のごと
おん懐ろに沈みゆき。

方舟出で、橄欖の
一葉啄む白鳩に
人の運命は讀まれたり

星より古き靈魂の緒の
君に宿りて成りし名は
永遠にな消えそみふみより。

燭光ゆるゝ七燈明
一つ一つに爛り消す
衣づれ聖堂に響くころ
堂守一人をみぬ
春雨晴るゝ紫苑山
塔より懸る虹あふぎ。

人妻

静かなり――。
 眞夏日ざかる
 極熱を
 吸ふ『日向葵に
 何しのぶ？』――。
 答へ得ざりき
 不意なるに
 戦慄き絶る
 吾腕に

肉の香、零れ
 腫には――媚ぶ
 髓も溶くらん
 無量光
 鬱金に燃ゆる
 花――木蔭
 途に響きぬ
 肉すれは――。
 紫乳房
 あらはなり。

泉のほそり

見はてもわかす荒れにたる眞夏野原に
芽をふきて幾むらつゞき葉も繁る

荆棘の蔭に湛ふは『愛』の泉か
途絶へたり草は隠れを流れつゝ

行き憐みたる旅人のしるべ——木札に
國々の華文字書きしまぼろしを
蹄の痕のむきむきに偲ぶ今はし

ときめきぬ胸は——錆びたる馬脊に。

陽炎ゆるゝ日ざかりの空を仰ぎて

つと取りぬ鑿の一ふり——日は没れど

覺束なげに蚯蚓這ふ跟や今宵の

草枕——常闇辿る夢うつゝ。

あさけの光、日の翼——かくて日ざかる

眞夏野に閃めく影はいかづちか

鑿ふるたびに喘ぎつゝ、ややに讀まるゝ

石標は——泉のほそり『愛』の道。

上野の森はにて

君やいづこと腫も杳に
 人目忍びてイみぬ
 夕陽まばゆき木下蔭
 遷るは君と我れのみか
 陵宮寂びて歐風の
 簷端に絶えし常明燈
 めぐる水沫のさだめかな
 (二片ごとに滅びゆく)

心の宮殿の薨讀み
 蘆の葉に似る世に立ちて
 哲人が築く二聖柱
 君もあはれと夢みしか
 文の林に分け入りて
 みらあの山莊に眉昂る
 詩人宛ら舊約の
 韻あまると憬がれし
 君をし今宵ぬすみ見む
 面影肖たる行人に。

四つ袖口を振りゆきし
 春の姿はほの見ゆれ
 語りて詩歌の香に酔ひし
 白晝も小暗き木々はあれ
 荒ぶる八重の高潮に
 文使鳩は舞ひもごる。
 麗人あどに胡沙の空
 騎士が打ちふる劍より
 重き彩筆揮ひつゝ

還り來まさば春のあけ
 覺醒よと黙示傳へませ
 書かば血躍る胸と胸
 不忍池面すべる夕靄や
 胡蝶欺く落葉散る
 木の間縫ひゆく白雲よ
 心しあらば言傳てよ
 詩にもあまる此の息吹
 伊太利越へて村雨めて

埋 火

夜は深けぬ、君が眼光こそ人魅すれ。
 くれなる燃ゆる唇にきいつを語り——
 はた小督を悼はる果に哲學に
 之ききと笑みてなにすらに星眸を外らす。

美はしの頸を垂れて語らはず
 我れもの言はず御佛のみ前にすはる

うら寂びし庫裏の一室に——影二つ。
 色卽是空——至理と思ふか君は。

額あげて口籠る。——やがて炭さして
 仰ぎもえせず慄々と埋火つくる

二の句さけ——『寂びし』と、我を盗み見つ、

世も人も燈明も見えず、御佛も
 慈眼を瞑れ、ゆく春の姿も今よ
 イむか、——我らの接吻のふるる刹那。

寂びしき笑

顔見合せて『いざ先づ』と
競技にかゝる譲り合ひ
『さらば』と幾何學の奥妙を
狙うて射たり定例のごと。

青毛氈に白球の
折線畫く電光
敵の白球かろく蹴て

その赤球もころころと。

燃ゆる星眸の一狙
魂も入れよと突き突くか
赤白赤と入り亂れ
もやもや艶に頬は熱る。

『七つ返す』と穩かに
隅に突きだす雅人を
秋草かをる袖翻りて

(70)

心にくしと吐きぬ。

折から高く「三つげ」と
叫ぶは似たる矢場女
發矢と又突く麗人を
『ひひ』と淋しく見て笑ふ。

香車

わが行く道をおのがつゝ
脆く守る『歩』は戀えよか

(71)

異邦の『王將』をいや遂に
星の林を斜線に
はた直線に飛ぶ棋馬も
智慧に餘れる『金銀』も
一步ごとに逡巡へご
中に高飛び一路に
九連城を行く『香車！』
『耻すか君は此の棋馬に
「桂馬」な問ひそ、あな哀れ
眇目よ——君』と接吻けぬ。

生の影

をち方に日は今沈むあかあかと
 鈍色なせる西の空——むれ飛ぶ鴉！
 野も森も包めり杳に暗愁の
 脈の流れか——鐘の音遠流のひびき、

夕ぐれの寂寞——胸に枳の
 刺あり、さすか心の臓さは小揺がじ
 あだ思——昨日に實りし其の落穂

拾ひ足らはず、あな二人さゝやぐ今よ、

新妻の眉こそ瘦れ草木こそ
 痿へたれ地に額づけて雄々しき祈！
 かくて只一夜の慰樂——その値
 えやは——問はじか生の影うするゝ相

暗愁のいろを湛ゆる鐘の音
 遠流の餘韻ほの響く森端に一つ
 今つけし燈火ゆらぐ大河は
 永遠に流るゝ闇の中、槽ぎゆけ二人、

妖精が口吟さめる

夢に郊外に杖曳きて、くぬぎ林に若葉のさゝ
やぎを聴く、一半の眞理あるかと耳かたむく
るころ思藻鮮かならんさして夢さめぬ。是れ
自ら詩意を解きぬに歌成りしゆ也。たゞ
聴く櫟林には内村鑑三君あり、高麗には伊藤
博文君ありと。

『神の財とかいざるの
財わかちし神子逝いて

歴史はめぐる二千歳
呪の杖を振るたびに
冥府を領する奇績成り
神も眠るか束の間は、
暗黒と光明の戦ひに
丘を流るゝ新約の
血潮の飛沫、村雨めて
あらぬ毒艸、香も高う
葡萄、無花果かれはつる――

羅馬の古廟の庭廣み。

暗黒と光明の戦ひに

今はた杖を振り揚げて

亞細亞の東高麗の空

處女泣くべき春の夜半

伽羅の枕を竊と揺れば

黄金榮にたり敷島に

牛頭馬頭黄金の香に酔ふて

淨財こゝに降りぬと

古りし戯曲の「御意のまゝ」

踊れどこそは祈りしに

三日に建つべき宮殿ありと

叫び出でたり聲高く

神の息吹に血も燃ゆる

若き男子は梓弓

腰に張りたる老人と

論らふかな「かいざるに

(78)

財還へせと喧びしく
暗黒と光明の戦ひに。

『詩人謠はじ鳥鳴かじ
卿たゞ孤獨謳ふとも
肉の林に蠢々ど
毒酒を舐むる面影は
我れ妖精の領なり』と
羊血祭る笑ひがほ。

虚無と西行

(79)

虚無の郷には
足らざりき
一杖かろき
旅の空
雲は無心に
過ぎゆけど。

山は裂け
海はあせなむ世なりさも
君に二心われあらめやも

寒^い 有^う 薰^{かを}
嚴^は 情^{じやう} り^り
ケ^ヶ の 花^{はな}
根^ね の

虚^き 足^た 鷗^う 心^{こゝろ} 夕^{ゆふ} 一^{ひと}
無^ひ ら 羽^は の 指^{さし} 指^{さし} 心^{こゝろ} 夕^{ゆふ} 一^{ひと}
の 郷^{きよ} の 琴^{きん} の 弾^{ひら} 指^{さし} 心^{こゝろ} 夕^{ゆふ} 一^{ひと}
に は づ れ に の ！

虚^き 足^た 枯^か
無^ひ ら 木^き
の 郷^{きよ} の 枝^{えだ}
に は き

炎むら

産聲をあげたる刹那復讐の
 炎むらに燃へぬ世も父も妾を咒ふに——
 迷信の傳説うのむ囚徒よ、
 今日醒めずばをろちこそ女人の味方、

ああ胸に高鳴る鐘は肉むらは
 慄きふるふ。——悪相と嘲むとすれど
 目瞑れば荆棘の繁み罽毘

映りぬこれや幻影か大蛇の眼光は、

目醒めたり曠野の東火を吹きて
 曠恚の炎むら執念くも鎌くび高し
 百獸もひれふせ額を。——白日の
 扉に潜む淫樂の夢こそ破れ、

敗残の喘ぎもあはれ億劫里
 海にただよふ落日は血潮にまみる。——
 野も山もほのほに焚けむ小ゆるがば
 大蛇の眼光に——今、還せ裸體の御國、

病みほけて

心の花第十一卷四の號に「常暗のし

まの淵に」と讀ませ給へる歌人に

病みほけてあんかを友に
仰ぎ見る親王内親王様を
美しとこそ雛祭に
衛侍が焚く焔もありや。

病みほけし胸の思に
ふさはしき歌もありやと
雅歌源氏めくる小袖に
流れ来る桃の花の香。

花の香に幻しのぶ
「常暗のし」まの淵に
走りゆく麗人の袖
蝶一つ「伴」かあらぬか。

腫物

賣ト者、笹竹探つて四ツ辻の
 眞晝の下に黄表紙の、其處此處めぐり
 口にこそ吉凶を語り天運は
 義と、たゞ靈の美し郷——そこにぞ在りて
 黄金こそ悪魔のものぞ罵れど
 淫婦が貢ぐ卦料に舌打ち鳴らす。
 こは不審議！蚤か虱か、蚊か、蚋か
 蝨したる痕のつぶつぶと腕は膨るゝ

吾父は天草役に犠牲となり
 遺族の血には伴天連の魔法によりて
 皇族の梅毒も、癩者の爛眼も
 癒す力のありとこそ聞きしは夢か。
 淫婦去り、博賭、詐欺に老怪の
 輩も散るや檳榔の毛ごろも敷ける
 高車、駿馬に曳かせ飛ぶ如に
 走れる音にも、——流れたり腫物の膿は。
 『毒だめを喰ひし辻の伴天連が
 居眠る姿いざ見よ。』と腕白わめく。

音羽山麓にて

駒鞭打ちて銃劍執りて
 鐵火の洗禮受けし身の
 今ふる郷に歸り來て
 麓逍遙ふ夢ごゝち
 歴史の威嚴を蔑しつゝ
 不覺になびく『百世まで
 神寂びゆかむ』歌ごゝろ
 平安朝の面影に

あゝ誰が讀みし峰のかづ
 三十六の翠巒は
 いろ五彩に紅葉して
 四明ヶ岳に秋高し
 『忍びの道』に分け入りて
 我邦の精華と謳はるゝ
 義士參禮の夜姿を
 しばし偲ぶも興盡きじ
 聖堂眩く仰ぎては
 残る木匠の鑿の香に

精靈のびゞき揺蕩ごと
舊宗教も身にぞ泌む。

敬虔深き詩人が

『我を緑の野にふさせ

安息の水濱に伴ふ』と

謠ひし韻も匂ふかな。

崇厳き空想に憬がれて

美神の琴を偲びては

微笑まれたり瀧壺に

京人形の夢の痕！

天使の朝あけに

救主の頌歌謳ひつゝ

白き翼を洗ふとも

何誇るべき此靈境。

あゝ『方丈記』章編解けて

火花再び燃えづるも

こゝし残らば後世の

詩人の恨あるべきや。

其の夜なり

悪魔よ。と、虚榮の市街の悪魔よ。と
 譏られつゝも俗人の器樂に熱り
 ふと射たる瞳か、はたや強かりし
 接吻しのぶ——葵の花は緋に燃ゆる、

盲ひなば君盲ひなば盲ひなば
 太陽と云ふものに永劫に光は失せむ

その夜なり我たゞ一人美しき——
 不安の動搖はつる音の器樂を聴くは、

夜となりぬ。——葵の下に渦巻きて
 耽るを見ずや傷ましき爛の舌に——
 蛇なり二足！咒はれし眼は青光る。

汗ばみし額にかゝれる緑髪に
 夢は醒めたり。鶏曲の音に——はた偲ぶ
 愛慾の旋律たへざる世の相！

京人形に

わが宿の隣のあかちや
んを偲びつゝ讀める。

京人形に魂いりて
息吹き初めしと驚きの
瞳あやしう見入りつゝ
夢かあらぬと又しても
灯影の床の嬰兒を
かい抱き上げて頬ずりする。
星より遠き世界から
此の世戀しと儼がれの

闇の細道くぐり来て
その細道に疲れたる
小さきあんよを躍らする
襦袢の仲に喜びて。
夫待ち顔に眉匂ふ
町一番の嫁御寮
思出多き小袖解き
『やゝ』の晴衣に縫直す
針の運びに詩は溢る
繪にも書れぬ親ごころ。

紫陽花

いひ寂びにたる人の言の葉たゞよふか
若草かげに蘇生れるか(ゆ)く春の
あはれは——犇と臃げなれどまざくと
映るが裡にいと眩しきは君がまみ。

暗き黄泉路を辿りて又も牢獄に
急げる足搔き今振り向きて身慄ひぬ

有邪無邪の生にも其れと覺ゆるは
胸血涸れゆく其の滴を刻むやう。

眩しき星眸は誘ひつるか假寐に——
ふとしも醒むる夢の悪感に紫陽花の
花は榮へたり。——「さらば」と告げし接吻の
いにし園生に日射は沈むゆるやかに。

秋の夜の賦

孤燈おぼろの文机ぶくろに
 逝にし豫言者醒ましても
 亡びゆくらむ小羊を
 牧場に還す我おもひ
 響くは歌の一律か
 今、角ぶねに縁ゆかりして。
 無名ク丘を漂らへば

曆れき忘れし隠者いんじやぶり
 真洞まどうを出でし世ごゝろか
 墨繪すみえあざむく森蔭の
 あたり、罩おほりめたる夕靄ゆふかりに
 観想くわんさう、榮さかゆる精靈せいりやうの影。
 雲井遙かの花床に
 胡蝶こてつ姿すがたの歌姫が
 謠うたふ餘韻よごんか息吹いきふきかも
 樹々ききを書きし月影の

明暗しるき二いろに
 孤影も映る苔のみち。
 見よ芳草は野邊に枯れ
 落葉永久に朽ちゆけど
 真如の光あふぎては
 胸にはいたく思する
 あゝ靈絃のひびきかも
 流轉の影は失れゆく。
 華麗なりし我が愁
 轉變やすき世の相

みな泡沫と消え失せて
 夕靄かすむ月影に
 神秘き感懐や繪巻物
 解かば橄欖花咲かむ。
 窓に緒琴を奏てたる
 風の名残か草むらに
 今、銀鈴の音は清く
 漾ふ靄に睡蓮の
 夢の睦言、歌姿
 不壞の境に夜は深けぬ。

モーゼの眉に

獸半けものなかばの偶像きざりに
 祝詞のりと捧たぐる世よに生なれ
 ビスカの嶺みねに永眠ひびるまで
 みことば聴ききぬ夢ゆめにさへ
 偉大たほひなるかな五經ごけい成なる
 エルの河面がほの漣波さなみに
 紅裳こうさからげし姫君ひめぎみに
 葦あしの繁しげみを吹ふく風かぜに

ヨブの眉に

讀よめざりき惡魔あくまの眼めには
 豎琴たてこの哀あはれの曲きよくを
 腫物しゅぶつさへ流ながるゝ手てもて
 搔かき鳴ならす胸むねの調しらべは
 『君與きみへ、君取きみり給たまふ
 正義たうじぞ吾神わががみなる』と
 嗚呼ああ呼よさても善よくぞ謠うたへる
 斯かくてこそ其そのの聖徒せいとなれ

ダビデの眉に

劍を執りて君立てば
 天下は治り人民安く
 筆を釋きて君書けば
 詩は調成り鳥は鳴く
 帝堯嘲みし似非人に
 「緑の牧場に我れ眠り
 憇の水濱に我れ飲む」と
 君が一曲弾かせ度や

イザヤの眉に

年若き君が祈に
 幻影か、現か、靈の
 たん姿、四周に眩て
 飛翔は天使の翼！
 『地は神の榮光に充つ』と
 聽ゆるに戦慄つゝも
 見よ、立ちて叫ぶ豫言に
 新興國を西に東に

一 滴

何處より我は來りし疲れたる
 蹣跚く脚をふと踏へ周圍を凝視む
 灰濁みし空に懸れる星一つ
 たちまち流れ何處にか識別すなりぬ。
 夢かそも暗より暗へ産聲の
 葬られたる痛ましき呻吟に似たる
 啜泣き——常緑葉はずれの疑ひに

彼女の瞳！慧星の運命を偲ぶ。
 堪へ難き肉の慄き吾靈の
 争闘に疲れ斯くて尙ほ何處に往くか
 怖れつゝ我身殺ふ一種の
 感味は蝕むか吾こゝろ死の影慕ふ。
 されど尙ほ只一滴あぶさむご
 痙攣たえぬ臉に慾求を知るか
 (はらからの相姦)ねがふ血のめぐり
 無限に走れ何處にか無限に走れ。

清教徒の最後の胸に

余は信なき現代の在ゆる思潮に
少しく平かならざる者の一人也
調整はされども此篇成る所以也

桀刑の天晴の場飾る

婦女童子、學者、賣人、

尼君や、さて監督も

『信』一つ世には換えじと、

頬笑みて酒杯執るか

火と硫黄たぎる鉛も

なみくと溢れ流るれ

『靈の宮』燃ゆるか、いかに？

メリーとは胡蝶逐ひつゝ

花園に美し夢路を

かぐはしき衣づれ彩に

漂らふと思ひしものを、

今、宣らす女王の御名よ

『殘虐を、それ殘虐を』

ためらひそ躊躇そとて
 逆立ちぬ柳眉は魔女と
 三四百!!!人影ゆるる
 刑場の雲の鈍いろ
 草木痿へ石も咽ぶか
 静まりぬ冥府の關守
 火刑の蠟燭の千火に
 ふつふつと寂寞を破り
 解けゆくか肉體いくつ

四肢散りて脈管あらはに
 迸しる我血眺めて
 或人は最後の祈禱
 『我ころろ主よ受けませ』と
 泰然に語りて眠る
 或人は母のみ膝に
 緑子が夢逐ふ姿
 信一つ世には換えじと
 『靈の宮』燃ゆるか、いかに？

雛工學士

雛工學士類笑みて

『君が親類は白痴ぞ。』と

煙草くゆらせ議論する

『雲か、山かや、吳か、越か—

雲と山さへ見分けえぬ

人は白痴。』と警句吐き。

『およしなさい。』と註書くを

『さらば式部にももの申す—

八百屋がすなる請取の
は也てふ其の也と
よをうじ山と人は云ふ
也てふ也に區別ありや。』

『工科大学卒業に

詩歌の試験も興なれや—

問題まゝの質問か。』と

しつべい返す女聲。

雛學士は頭掻き。

詩人は笑みて詩に作る。

亡き母の繪像に

夢かあらぬと名なくして
 旅より歸る故郷に
 母の星眸の動きなき
 姿見入りて喰ひしはる
 往にし追憶夢に見て
 目醒むる室の朝日影
 春艸かをる香やゆらぐ
 陽炎映る白窓の

光に榮ゆる繪像かな
 鎮守の森に賜ひたる
 『健在にませ』の一言は
 なりぬ紀念の祝福と。
 (あゝ聖壇の香の中に
 曙の光と若榮ゆる
 聖母の姿あふぎつゝ
 君が御前に萬有は
 塵に等しと詠嘆の
 讃歌宛らの餘韻かな。

臨終いまはのきはに背きても
美よき歌うたにむの戦いくさに
年は古ふるりつゝ疲つかれつゝ
繪像えいざうの賛さんにふさはしき
詩うたなき夜明あきふと偲おもふ
胸むねにむつかる稚影わかかげ!

麗人うつくしきまがふたん膝ひざを
滑すべりて又またと行いざりし
その日ひの日ひ記きのありもせば

桃ももの花はな咲さく春雨はるあめか
萩はぎの花はな散ちる鐘音かねのねか
眉まゆかすめしと記きされむ。

永遠とこはの袂別わかれに背そきたる
長恨ながみを乗のせて朝雲あさぐもに
ふる郷遠さとく言傳ことづてむ
懺悔ざんげのこゝろに鞭打むちちて
繪像えいざうの賛さんの成なる日まで
ゆるし給たまへと御墓守みたまもり。

鑪
缸

頑迷の輩を嘲め永劫に——
 靈と肉との御力を二けたるやから。
 これなくば迷はじ人は——夢の香に
 獸類の慾に疲れたり不安の姿。
 洞穴なす胸に閃めく電光！
 亡者の影か、生靈か、よろほひ潜め。
 今ここに我が踏む土は揺がじと

おたけぶ眼光に人一人あがかば足らむ。
 抽象の文字に馴染むか肉むらを
 蔑する痛みはた腐肉——爛るゝ片を
 火焙りて飽かぬ痛みに目醒めすば
 輪廻はめぐる。——魔の國は榮ゆくややに。
 戀はば見よ、風鳴る鞆はた沸騰る
 一團紅き塊を鑪缸の中心に——
 かくてこそ恨みはなけれ。あな詩は
 竭きざれ永遠に我胸に不盡の炎むら。

海風

讀み飽かば逃ぐるに如かじ人生は悲し、
 まだ見ぬ海を遠翔り、はたや雲井を
 天馳る鳥の自由に憬がる、
 るでんの庭も、あな如かじ君が翅を
 羽ばたきて浪間に泳ぐ遊樂には、
 幾夜なりしか眞白なる紙に映し、
 その影よ淋しき光、深るまで
 點けたる燈火！はた胸に嬰兒抱き

揺れるうら若榮へし人妻の
 心情も如かじ、あな出發む、漁船は鐵索を
 檣を釣り上げながら外國へ
 錨を抜きぬ、いはれなき抱負に疲れ
 最後の袂を別ち涙ぐむ。
 あゝ檣は嵐呼び吹き來る風は
 荒海を流れて帆影すうる間に
 花咲く島を失ひし時にも似るか
 さはれ聽け水夫の唄を我こゝろ。

嘆

静な姉妹わが靈は褐色なせる
 葉も散りて秋かなしまぬ汝が眉に
 はた天使の瞳の道遙ふ空に
 蒼穹に白く悲嘆ふ忠實な
 噴水寂びし庭のみに噴き騰るやう
 (わが靈は) 嵩る。青き清かな
 大空に知る十月悲しさうにも。

青天に盡きぬ凋落映る時
 泉に白き水上に枯葉も寫る
 風に舞ふ土は冷き褐いろの
 畝を造りぬ、一條の長き終焉の
 光線放げ黄める夕陽沈みつゝ。

何處にか

ああ何處にかありと知る
まだ面前みざれども
今なほ——なほも聴かざれど
我れに告ぐべき其の心は

潮路か、陸か——いと著く
雲井さまよふ月、星の

夜々の通路をち方か
近くか、いづら知らねども

籬の内か、をち方か
近くか、いづら——芝原へ
散りゆく秋の葉末にか
壁たゝ一重隔つるか

——クリスチナ、ロセツナ——

黒き愁

噫すつかり疲れた。

絃の音……

酒の香……

飽きた――

でも彼の乳のあたりに

震盪されまいかと思ふほど

高く亂れたやうに浪立ってゐたのは？――

噫この冷たいしかつ

胸ぢう病める色！

寂しい……

心に贅がなくなつたのか知ら

葉巻も不味い

が今ま暗中にびかく光る――

黒き愁……

壁……

蟲……

轍

雲迷ふ野路を杳に
 今ま落つる夕照の空へ
 草笛の悲曲の流れ
 斷續に消えてこそ行け
 灰濁みし白壁一つ
 たゞ一つ此處にも立てり
 夕げふり繞るが間に

群雀巢はず今は
 はたや彼の磯曲の遠方に
 黒潮の攪き亂されし
 大浪の崩るゝ響！
 何ものゝ胸なぞらへむ
 かゝる折ゆふ日は今ぞ
 涯知れぬ草村かげに
 照り返す最と彩かに
 二の轍平行る跟を。

胸の火皿の燃えてる隙に

灰濁みた空、重い空氣、夜は十時ごろ
 雨も降りさう風はないが
 泣く……鳴く……
 嘲けるやうに
 何だらう？
 何處だらう？
 何だらう？——
 「偽巢！偽巢！偽巢！」と繰返すやうに

高い塀壁……
 學者町……
 教會の空まで響く……
 ……
 凄じい
 あッ鼻の聲だ。
 重苦しい重苦しい鉛いろ
 雨になつた
 死人の血が滴るやうだ——

待てッ
 微かな微かな響がする
 快活な響がする
 何だらう、絹すれの音？
 あゝ驚いた
 燐寸の火を葉巻に點けて
 白い頸……
 亂れ髪……
 節搏れた腕
 あゝ其の腕を頸に捲きつゝ

狂喜の瞳！
 森端をさした。

たゝ囁いでる――

「……………」

華奢な華奢な指先が横に動いた

「愛は波状に似てゐると？」

「だから家庭を破壊してよ。」

「君こそは……」

「あゝ此處に荊棘の花が――地獄の花が美しい匂――」

『地獄の花が？』

『でもね—』

眩しさうな聲の音色で—

『Ought,*Would,**to be so**——』

毛色の異つた道學先生達は

生きながら死んで、斯な言を云つてゐらッしやも

冷たい唇で……………」

『まッたく君こそは—』

『……………』

『世の在らゆるものも君が肌……………』

急げ急げ

森端に急げ

胸の火皿の燃えてる隙に』

……………

……………

あら又點けた

白い頸……………

亂れ髪……………

節ふし樽たるれた腕うでに狂喜きやうきの瞳ひとみ！
劇はげしい接吻きしんよ
眼路がんろも杳はるかな森端もりはの陰かげに

星ほし……

鶏と……

養老院ようらういんが……

育兒院いくにんいんが……

(※古典主義、※浪漫主義、※自然主義)

若き日おもふ

礎いそ近ちかかりき壁かべづてに

夜よは深ふかけゆげご事こともなき此こゝの或ある一室いつしつ

森もりより――

野のより――

はた森へ

『悔くい』『惱なやみ』『恨うらみ』『憂うれひ』の密ひそかに

されど劇はげしき旋風せんぷうが翻弄ひるがへる落葉らくえつの氣色けしき……

あな此の胸さわぎ何事ぞ？

不圖こそ思へ捕へえざりし若き日を

『ヴォロンの器樂伴ふ肉聲の

吾胸射貫き目眩むやうな節まはし

はた其の黒き瞳の光……』

あゝ憂愁の雲のただすみ野の遠方に

春草やゝに凋むやう

吾唇は乾きしか。

薄れゆくなる夕照をおもふ
吾頬に觸るゝ麗人もなし

あゝ磯近き壁づてに

夜は深けゆけご事もなく

燈火ちゝと薄明る

海のひゞきに――

捕へえざりし若き日を

海のひゞきに思ふかな。

やぶれし心

物憂いやうな地平線から
 眩しさうにも
 冬の落日が
 今ま赤煉瓦の病院の壁一面に
 赤煉瓦の一つ一つに
 ??? 接吻してゐるのか知ら。

真青な女の顔が
 その窓に……

窓の外は

丘陵だ――

墓だ

何處までも何處までも續てゐるらしい。

して病院と墓との間に今ま起つてる

電車が轆る強烈な反響や
 其の裡にちやふるな工女の笑聲や
 消魂しい警鈴の音や
 そして周囲の在らゆる事象にも
 全然で啞だ
 盲だ……

見よ眞青な女の視線を
 今ま石像の冷い其れが見凝めてゐるやうに
 丘陵の――

墓場の
 或一局部に注がれてゐるらしい……

遠には
 雲の漂泊……
 星の嘆息……

あら最う闇くなつた
 と吾こゝろに
 まざくと映つるものがある

「白壁……」

處女の胸……

赤煉瓦の壁……

黒い黒い悪血それは流産の残りの一滴……」

噫あの落日は——

今あの落日は？

破れし心……

小鳥

若々しい而して自由な空氣の漲つてゐる

森林の蔭に小鳥の群れが

いかにも愉樂に堪へきれぬ如に

囀つてゐる其の聲が

我が心臓の鼓動に觸れて

夢の仲で——

何か斯う——唆かすやうだ。

目瞑めづつて其の轉まづる聲こゑを聽きく――

と我が心の奥底おくそこでは

暗くろい暗くろい冷つたい影かげが

譬たとへば底そこなし沼ぬまに足あし搔かき疲つかれて

今いまに最まう沈しみゆきさう。

でも小鳥の群ぐんれは鳴なき止とまない。

眼めひらくと

森林しんりんには阜月ふつきの日ひざし

晴はればれしいのに

熱あつい涙なみだが故ゆゑしらす頬ほを流ながれる。

醒めずば

沈睡の夢魔はれし褥にて
 憂鬱病に悩みたる腫に浮ぶ——
 何ものか我れを欺罔る、あなあはれ
 寝ねたる間さへ、ふと秘色こゝろを誘ふ。

その扉ひめ置くべきを傷ましき
 怨に耽りし追憶の翅か悔か
 死の國の深けゆく森に似たる夜半

胸ちう絶へぬ騒音の深き吐息！

目眩れば灰濁色に憂ひたる
 心の扉——幽にも何時しか蝕みし
 けざやかな夢は再び薄れゆく。

かくて尙ほ秘色の曲調ひやくとも
 彼の世に住める陶器師さめずば遂に
 觸るべきや二の酒杯を唇に。

秋の歌

柳の落葉が

グアイオリンの如な

低い呻吟で

私の靈魂に

散りゆく嘆を告げる

ひそやかに誘ふやう……

幾日間も

かくて私が

窒息やうに色青褪めて

私の心に落葉を喚ふ――

その時わたしは

風のやうに泣き且つ呻吟く、

惨酷くも秋風が

思ひやりなく

哀れにも葉を吹き散らすと

私も處えらばず行くけれど

枯葉のやうに

行衛を知らぬ。

――パウル・ヴェルレーヌ――

私の全人格から

眞黒な眼鏡をかけた青年が
 電車の敷石を歩むで
 今、私と行き擦れる
 横から見ると
 盲だ——瞳も塞がっている。
 その側に
 工夫の一團が
 土を掘りつゝ、端唄を謳ふ

淫樂放縦野合——凡て此れらのものゝ
 窮りなき猥褻なる節……
 日は今さかる。
 かの節調の儂く消えゆくところ
 低い簷端に
 看板が懸つてゐる
 『輕便妊婦預り所』
 看板の斜向には

鐵管があり、鶴嘴があり、溶爐がある——
溶爐には鉛が沸騰つてゐる。

あゝ其れらの強き印象。

私の全人格からいゝる、いゝじよんなどは悉皆消えて
凡ての感覺作用が

最う最う滅亡なつて了ひさうだ——

でも初夏の青葉は

我が臭覺神經を煽り立て、

憂鬱病に誘ふやう……

黒い瞳

走る走る

憂ごゝろの夕空を

濕つぼいのに

何處まで行くんだらう——

雨粒が……

雨粒が滴つてゐる

汽車の窓の重い色に。

あら 俯向いた人の影が
 玻璃に映つてる
 亂れ髪……
 黒い瞳……
 瑞々しいのに
 渴いた光！
 何かに餓てゐるらしい――
 それとも 僕の眼の錯覺の勢か知らず

あゝ 眞暗になつた
 潮の響のやうに恐しく轆る音
 長い墜道！
 何處までも何處までも續けば可が――
 盲……闇……死……
 でも 彼の黒い瞳！

落日の強き印象

じめくくと微臭い此の一室に
監守の沓音に
疲れ切つてる鋭い私の神経は
何物も最う意識しないほど
疑つてゐる。

でもたゞ何處かに
ヴァイオリンの絃の音呻吟く。

かの音こそ
灰白む我が官能にも
甘い接吻と愛の憂愁と永切の離別の曲とを……

かゝる時
自動車の轍の音は
鐵窓の彼方に響く。
でも其れは羨まない。
黄色い落日の強き印象——
私はよく其の色を聴いてゐる。

君やいづこの記 (附録)

秋風蘆荻を吹き渡り、落葉破窓を打つて、遊子の心を傷ましめ、限りも知れぬ愁にほゆる頃なりき。朝ゆふ憬がるゝ古人の奥津城、今ぞ尋ねて、しばし世ごゝろ去らばや、と彼の夢幻的の歌人の、ひまさへあれば、朝夕逍遙遊の古刹なりきと言ひ傳ふる自澄院、字瘤寺へ杖を曳きにき。

金色いろあせたれど、誰か彫みけん一刀三禮の鑿の香か市街を抜きたる小高き丘に『鎮護山』の額面嚴かめしう仰ぎ望みて正門を入れれば、日はまだ高く斜めなるに、古人の足跡想ふべし、一瞥して小暗き境内の光景は、宛ら深山の孤棲に

も似たるかな。見よ、其の稜角ちびたる石逕をさしはさみて、野生のまゝと覺しき松のかづく、雜木まぢりて林の如く、楓葉獨り霜わびても、みぢ待ちつる風情なれども、落葉をこゝこに狼藉して、雀羅偲ばす堂宇の簷端、纒かに洩るゝ老いし一本のしだれ櫻の枝も梢も風に揺るるはげに幽寂の眺めならずや。近寄りて堂内を窺ひたれど、何處なるらん奥津城ばかり氣になりければ、たゞ薄暗き壁龕の前、經文積みし淨几の邊に、古色掬すべき金蓮の花の一莖、南牕の光を受けて反映せるのみ鮮かなりき。

垣に添ふて左へゆけば、門あり空に聳ゆ。覗きみれば即

ち菩提所なりき。制札あれども、禁を犯して扉を披く。ゆるせ、君めで給ひし歌の一ふし『花盗人をつけて行く蝶々』に似たる吾思慕——あゝ此のくしき胸のひゞきや。さすらひつゝ新塚あさる。千草八千草滿地に生ひて、小笹交れる荒墟の境、累々たる墓標讀みつゝ、幽かに殘る徑路を縫へば、裳に觸るゝ名なし草骨に泌むべき秋風に、眞白き花びら散りしけり。

やがて一周して、郭内のいや果、本堂の背ら近くに出でゆきしが、更らにそれぞと思はしむべき影だもあらで、境外のあなた近くに廓然たる城郭見えぬ。そはげに市ヶ谷監獄

なりき。あゝ彼の筑紫の空の旅路にて、君吟詠の歌がたり
 愁調の名残とめにし『停車場にて』の一聯こそは、今宛らに
 復活して、憐むべき寡婦、孤兒、罪人は言ふも更なり、鬼の涙と
 嘲けらるべき巡査さへも、髣髴としてもの言ふ如く、一種の
 哀感胸に湧きしも、只管君の奥津城慕はしう、踵を旋して西
 に、東に、左に、右に、草かき分けて尋りにき。されど其も亦あ
 だなりけるに、疲れはて、今度は遂に僧房に至りて其の由
 きけば、見えざるこそ理なりき。げに君逝き給へる當時、余
 は胡狄の野、鐵火の巷に彷徨しつゝ、吾松江中學に於て臚げ
 ながらも或物を得させ給へる君悠久の安き住み家の所在

さへ知らざりし也。さはれ尙ほ君逍遙遊の跡を尋ねて、唯
 ある墓畔にイみつゝあたり見遣れば、ふと目を射たる墓じ
 るし。噫、世の遷りゆく流轉のさまは、無常の相は、見よ此の
 蟪蛄住むべき草むら蔭に、風跟雨跡を止むる一片の石文に
 竭きたるを。星霜幾たびか経ぬらん定かならずて、彼の東
 坡が讀みけん如く、ほとく『欲尋年代無甲乙』けれど、借問
 す尙ほこは誰が家の石ぶみぞ、生前の榮華を語る此の一基
 吊祭永く至らざるは、訝かしても訝かし。げに其院號さへ
 給はりたる此の居士の、いかなれば其の半面をば空うして
 苔蒸したる。思ふに、かばかり嚴かめしき墓標建てつる施

主あるからは、真心の令聞も高き妙齡の未亡人が、やがては受くる其の授戒、赤い信女の哀傷深き其の昔、落花散りしくゆく春に、あはれ紅涙灑ぎて、一たびは又、夫もろともに黄泉路願ひし雨の夕もありけんものを。魂や迷はん此のあるじ。あゝ一家流離して、いづくへか散りうせたる。さるにても亦止み難きは、我世のさだめなるかな。げに今日紅閨の人、明朝安ぞ枯骨たらざる。之を思へば、いづれ朽ちゆく此の墓標、空位ありとて何か傷まむ。只こと古りたれど、英雄も、匹夫も、斯くして最後を同うしなば、世榮に誇れる世人の心ぞ聽かまほし。

仰ぎ瞻れば、鬱蒼として空に聳ゆる杉の木立は、薄暗き無湖の色は、太古このかた纏へたる空氣にあらざるか、それよ此の蔭こそは、君逍遙遊の樂郷にして、又瞑想の聖地也けれ。あゝ眞晝に、眸つむりて眼前、超世の理想も高く、靈の翅に打乗りつゝ、美はしの夢の姿に歌得にし君が面影、偲ばるゝかな。げにや其の歌の調を學ばんには、こゝこそはふさはしとも適はし。君は孤寂のさがにして、宰相の印綬えしより野人一片のはが、きえたるを稱え給ふの人なりき。

思ふに、彼の日夕ウエスト、ミンスターに杖曳きて、梵鐘の餘韻きゝつゝ、累世の詩人の奥津城、貴しと額きて、やをら錦

繡の曲しよべかなでしアーピングの『寺院』もさるとながら君讀み
 給ひし曲婉の哀史一編『胡蝶』の卷に高濱なにがしをして、い
 みじくも戀の極致を謠はせ給ひしものげに此の半ば無名
 の墓碑に、歌の命いのちをえ給ひて、遂に其の床かしき遺韻をば、百
 世に響かせ給ふに至りたるにはあらざるか。あゝ今し響
 ける草むら蔭の金鈴の音ねも、空吹く風も、永久とこに答へざるこ
 そ恨みなれ。

果てしも知れぬ空想に、名殘惜みて振向けば、いつしか夕
 日ひしづみて郭外のあなた遙かの蒼穹たそごには、丹碧鮮かに美は
 しくも亦雲の鬢むすき。見よ、彼の右手みぎに方りて、橙たちいろの雲を

抽きたる杉の木立や、雑木らは、宛ら敷へ難き尖塔連らねし
 墨繪の如く、細長き一本の煙突交へしも亦名工の彩筆眺む
 るが如、更らに南へ流るゝ紫雲の一片、名殘なくも、黄金こがねのさ
 ざ縁べり、面眩おもむゆくげに塵外の眺めなるかな。

低迷しつゝ、元きし路へ踵を旋して、彼の制札打ちし門内
 を右すれば、朱あけに塗られし一棟の大師堂は、春日の古都に、王
 朝たもの俤かげ語る御社みやしろの如、堂に隣れ一基の地藏尊は、いかなる
 巡禮か運びにけん磊々たる瓦礫に全身を埋めつゝも、目守
 る我れに、莞爾として笑顔給へり。あゝ此の朽ちし鐘樓の
 下、萩の草むら、いろあせて、花既に凋落すれど、げに此の慈相

に富ませ給へる御佛に、心の清き童女の群れが、合掌しつゝ
君、愛誦の『普門品』を咏歌して『衆生受諸苦惱、聞是觀世音菩
薩、一心稱名』しなば、即時に其の音聲を觀じて、皆な解脫し得
べけむ。あゝ此の幽寂なる一境内、君めで給ひしは理なる
かな。げに其の一石、一草も、古人愛玩の遺品なるか、とおも
ほへば、蜘蛛低回去るに忍びず。

* * * * *

翌日午下すなはち雜司ヶ谷に到る。此のわたりも亦君
逍遙遊の郊外なりきと。綠野、平蕪の趣まことに愛すべく、
萬丈の紅塵は夢にだも思ひ設けぬ村里なりき。行きゆい

て境内に入りしが、平和の郷には、人のゆききも見えざれば
いづこがそれぞ、と問ふよしもなく、甲乙並ぶ墓標を縫へば
忽ち吾目を射たる墓じるし。あゝ見涯もわかぬ八重の潮
路の荒ら浪も、天開け地定りて、創世の卷の序文いできしよ
り、同じ渚に幾たびか寄せきにけん今數ふるに由なけれど
人の思想も、西、東、流れくゝて小休みなし。見よ、此の十字架
の墓、誰が書きつけし水莖か、正面には『天主婢なにかし。』と
筆太く、其の傍らには『我は復活也、命也。』と註されたるは、お
そらく秋津島根のマリヤなるべく、而して今我があさる墓
標のぬしは、南歐明媚の離れ島、橄欖の風、香ばしき郷に生ひ

たる佛弟子にして、名さへ床かしき淨華なるこそ、かれこれ
思合さば、美はしくも亦をかしけれ。

かくて幾たびとなく同じ墓畔を往來して、漸くあさりえ
たり。見よ、共同墓地の東北隅、天らに聳ゆる公孫樹下の芭
蕉葉茂る其の蔭に、一基の墓標新たに立てり。題して曰く
『小泉八雲之墓』と。襟を正して近寄りみれば、誰か捧げに
し手向けの花か、墓畔にあまねき躑躅のほこり、頂垂れつゝ
も數莖の菊の二いろ、檜とともに香を止め、背らに建てし卒
塔婆も、寒竹、南天、檜葉などの葉蔭にもれて、『毎日晨朝入於諸
定遊化六道拔苦與樂』と鮮かに讀まるゝは、げに此世ながら

の淨土也けり。されど又おもへば、一たびは世界の騷壇を
風靡したる一大詩人が、今はや既に白玉樓中の人となりて
長へに覺めぬ眠に就きしからには、所詮はこの世に残る一
塊の石、いかでよく燦爛たる君が文績を悠久に傳へ得べき。
さ也、そは彼のミルトンも既に歌へり、『百とせの勞作により
て積み上げられたる石碑なるか。天らに聳ゆる三角塔の
下なるか。然らじ。』とこそ。我れに歌なし。只その全編
を誦して、そゞろ血の湧くを覺えにき。

見るほどに、雲がくれたる秋のゆふ日は、今し輝きそめて
若やかなる梢もれつゝ、墓標に映る其の葉影——あゝ其の

葉影をば何物なるらん遅々として動き初めたり。訝りつ
つ低視すれば、あゝこは小やかなる簞虫なりき。さ也、この
餘は多く語るまじげに君懐がれし佛陀輪廻の法音こそは
君の靈想と抱合して、遂に謠はしめたる金聲玉振の文一篇
の『胡蝶』となりしもの、こは是れやがて疑ひもなく君が信仰
告白の誓詞也けり。夫れ君の生前、既にかばかり燃ゆる信
念を抱き給ひしからには、など此のうつゝ世にて、盡きぬ恨
みに世をわび給ひて戀しかりける母の轉生なかるべき。
げに此の娑婆界にては、理想の翅徒らに長うして、反て小休
みなき運命の筈に掀翻せらるゝを思はへば、我らはいづこ

に行いて、其の胸のいたみを——心の缺陷を償ふべきか。
あゝこれ君にいみじき復活のたも、ひありしがゆえならで
やは。思ふに、君往み給ふ常世の國は、永劫不壞の蓬萊郷、菩
提樹薫る涅槃の御座に、法燈の眞如の灯、葉蔭に明かく、花長
へに麗かならむ。

去つて背らを廻れば、啾々たる秋風、芭蕉葉吹て、さらく
と『お鈴さん』『お竹さん』の乙女姿は、いづくなるらんあたり
に聽ゆる『からころ』の音。古りし卒塔婆には又『八絃塵刹
九有情類』と讀まるゝも、君、法悦の名残なるらむ。

かくて早や今は平生の望みに飽きければ、やをら墓畔を

立ちて去らんとするに、見よ、芝生のほとりを。咲き残りたる野菊にとまる藤いろの蝶、君めで給ひし歌にも似たり。

"On the pig-flower there is a white butterfly

Whose spirit, I wonder?"

あゝ君の芳魂今いづこ。

明治四十二年六月廿一日印刷
明治四十二年六月廿七日發行

(○詩集 煉獄へ)

(○定價金六拾錢)

不許複製

著者 高濱長江
發行所 瀧川民治郎
印刷者 岡小春
印刷所 自由活版所

發行所 東京市日本橋區馬喰町三丁目 今古堂書店
振替口座四九〇七番
關西賣捌 大坂市東區北渡邊町 杉本書店

目書行發堂古今

<p>リットン卿原著 原抱一庵譯 安藤仲太郎畫 小說 聖人か盜賊か ●前編定價金四十錢 ●後編定價金四十五錢 ●郵稅各六錢宛</p>	<p>中村春雨著 木清方畫 短篇 小說 角 ●定價金六 ●郵稅金八 十錢</p>	<p>黒法師著 木清方畫 家庭 小說 想 夫 憐 ●定價金四十五錢 ●郵稅金六</p>	<p>楓村居士著 木清方畫 軍事 小說 橘 英 男 ●定價金四十五錢 ●郵稅金八</p>	<p>廣津柳浪著 木清方畫 小說 二 筋 道 ●前編定價金六十錢 ●後編定價金六十錢 ●郵稅各金八錢宛</p>	<p>徳田秋聲著 木清方畫 小說 結 婚 難 ●定價金六 ●郵稅金八 十錢</p>
---	---	--	---	--	--

目書行發堂古今

柳川春葉著 渡部審也書 心 の 影 ●●定價金七 ●●郵税金八 十 錢	江見水蔭著 鐮木清方書 冒險 鹿 島 灘 ●●定價金七 ●●郵税金八 十 錢	德田秋聲著 小峰大羽書 家庭 落 し 胤 ●●定價金六 ●●郵税金八 十五 錢	塚原澁柿園著 富田秋香書 歷史 天 草一 揆 ●●定價金六 ●●郵税金八 十五 錢	柳川春葉著 渡部審也書 齋藤松洲裝釘 家庭 新 夫 婦 ●●前編定價金七十錢 ●●後編定價金未 ●●郵税金八 錢宛	正宗白鳥著 鐮木清方書 健全 誰 の 罪 業 ●●定價金五 ●●郵税金八 十 錢	德田秋聲著 渡部審也書 家庭 母 の 紀 念 ●●前編定價六十五錢 ●●後編定價六十五錢 ●●郵税金各八 錢宛	江見水蔭著 鐮木清方書 冒險 女 船 長 ●●定價金五 ●●郵税金八 拾 錢	廣津柳浪著 和田英作書 小說 橫 戀 慕 ●●前編定價六十五錢 ●●後編定價六十五錢 ●●郵税金各八 錢宛	江見水蔭著 鐮木清方書 小說 雲 が く れ ●●定價金六 ●●郵税金八 十 錢	橋本青雨著 鐮木清方書 戀愛 愛 の 犧 牲 ●●定價金六 ●●郵税金八 十 錢
---	---	--	--	---	--	---	---	--	--	--

目書行發堂古今

柳川春葉著 渡部審也書 心 の 影 ●●定價金七 ●●郵税金八 十 錢	江見水蔭著 鐮木清方書 冒險 鹿 島 灘 ●●定價金七 ●●郵税金八 十 錢	德田秋聲著 小峰大羽書 家庭 落 し 胤 ●●定價金六 ●●郵税金八 十五 錢	塚原澁柿園著 富田秋香書 歷史 天 草一 揆 ●●定價金六 ●●郵税金八 十五 錢	柳川春葉著 渡部審也書 齋藤松洲裝釘 家庭 新 夫 婦 ●●前編定價金七十錢 ●●後編定價金未 ●●郵税金八 錢宛	正宗白鳥著 鐮木清方書 健全 誰 の 罪 業 ●●定價金五 ●●郵税金八 十 錢	德田秋聲著 渡部審也書 家庭 母 の 紀 念 ●●前編定價六十五錢 ●●後編定價六十五錢 ●●郵税金各八 錢宛	江見水蔭著 鐮木清方書 冒險 女 船 長 ●●定價金五 ●●郵税金八 拾 錢	廣津柳浪著 和田英作書 小說 橫 戀 慕 ●●前編定價六十五錢 ●●後編定價六十五錢 ●●郵税金各八 錢宛	江見水蔭著 鐮木清方書 小說 雲 が く れ ●●定價金六 ●●郵税金八 十 錢	橋本青雨著 鐮木清方書 戀愛 愛 の 犧 牲 ●●定價金六 ●●郵税金八 十 錢
---	---	--	--	---	--	---	---	--	--	--

目書行發堂古今

德田清方畫 女の秘密 ●●定價金六十五錢 郵税金八

廣津柳浪著 復讐 ●●前編定價金七十錢 後編定價金七十錢 郵税金八

川上眉山著 新家庭 ●●定價金七十五錢 郵税金八

德田秋聲著 焔 ●●前編定價金五十錢 後編定價金五十錢 郵税金六

柳川春葉著 春葉集 ●●定價金四十八錢 郵税金六

大町桂月著 一枝の筆 ●●定價金四十五錢 郵税金六

目書行發堂古今

大町桂月著 閑日 ●●定價金四拾五錢 郵税金六

江見水蔭著 水中の結婚 ●●定價金五拾錢 郵税金八

小栗風葉著 春怨 ●●定價金七拾錢 郵税金八

中村春雨著 炬火 ●●定價金壹十二錢 郵税金十

中村春雨著 犯さぬ罪 ●●定價金八拾錢 郵税金八

やなぎ生著 女の望 ●●定價金八拾錢 郵税金八

目書行發堂古今

生田葵山著
鏞木清方畫
紅

淚
●●定價金八
●●郵税金八
十錢

德田秋聲著
渡部審也畫
多

數者
●●定價金八
●●郵税金八
十錢

宮崎湖處子著
山本研山畫
妻君の自由

●●定價金四
●●郵税金四
十錢

岡本綺堂著
鏞木清方畫
維新前後

●●定價金二
●●郵税金四
十五錢

德富蘆花著
柳川春葉作
不如

歸
●●定價金三
●●郵税金四
十錢

柳川春葉著
山本研山畫
雪子夫人

●●定價金二
●●郵税金四
十五錢

田山花袋著
橋本邦助畫
妻

●●定價金一圓五拾錢
●●郵税金十
二錢

眞山青果著
小杉未醒畫
南

小泉村
●●近
刊

眞山青果作
眞山青果作
憂

●●近
刊

德田秋聲作
德田秋聲作
同胞三人

●●近
刊

中村星湖作
中村星湖作
影

●●近
刊

柳川春葉作
柳川春葉作
操

●●近
刊

目書行發堂古今

